Ⅲ．乳汁分泌確立に及ぼす母体・環境因子の影響に関する研究

分担研究報告書

東京大学
水　野　正　彦

母乳哺育は児とって理想的な栄養法でありその確立は新生児の健康に直結するものであるとともに母体に対しても多くの利点をもたらしめる。しかしながらその現状は必ずしも満足すべき状態とはいえない。この理由として母乳の意義に対する認識がいまだ不充分であることも否めないが，主に適切な母乳指導法が確立されていないことによると考えられる。本研究の究極的目標は母乳哺育を一層推進普及することにある。そのためにまず母乳哺育の現状を把握し，さらに母乳分泌に関係するであろう母児・諸要因を解析し，これらに基づいた授乳指導法を設定することを計画した。他方，母乳分泌は内泌学的制御を受けており，その詳細な知識は母乳指導に理論的な裏打ちを付与するものである。今回代表的な催乳ホルモンであるprolactin（PRL）に着目し，生理的，病的状態でPRLと乳汁分泌との関わりを検索した。

A．産科的諸因子と母乳分泌との関連

予備調査により産褥早期と産褥１～２ケ月の時点での乳汁量の相関性があることが判明し，産褥早期に良好な乳汁分泌を得ることの重要性を確認した。また内分泌疾患を有さない褥婦での乳汁量とPRL値との相関性は低く，少なくともPRLの分泌異常を伴う疾患以外ではPRL値が一義的に乳汁量と関連しないことが示唆された。

本年度は各種産科的諸因子を抽出し，母乳調査用紙を作成した。さらに母乳の質的評価を行うために母乳中の各成分の日内および継日的変動を産科的諸要因との関連において調査中である。

B．内分泌疾患と母乳分泌の関連

下垂体のPRL産生腫瘍（Prolactinoma）ではPRLが過剰分泌されるが，本疾患における母乳分泌を観察した。結論として手術療法（経蝶形骨洞的腫瘍剔除）のみで妊娠に至った群での乳汁分泌は一般に不良であり，薬物療法にて妊娠が成立した群では良好な母乳が得られた。手術群での乳汁量が低下した理由として手術により妊娠産褥を通じPRL値が低値であったことが示された。

C．新生児因子と母乳分泌の関連

新生児側の因子として胎齢，身長，体重，先天異常や胎児仮死の有無，あるいは新生児期の異常（高ビリルビン血症，RDSなど）および各種治療（光線療法，輸液など）広範な項目を網羅した調査表を作成した。また分娩後の母児接触と乳汁分泌との関係は母児同室のあり方とも関連するため特別にとり上げる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

母乳哺育は児とって理想的な栄養法でありその確立は新生児の健康に直結するものであるとともに母体に対しても多くの利点をもたらしめる。しかしながらその現状は必ずしも満足すべき状態とはいえない。この理由として母乳の意義に対する認識がいまだ不充分であることも否めないが,主に適切な母乳指導法が確立されていないことによると考えられる。本研究の究極的目標は母乳哺育を一層推進普及することにある。そのためにまず母乳哺育の現状を把握し,さらに母乳分泌に関係するであろう母児・諸要因を解析し,これらに基づいた授乳指導法を設定することを計画した。他方,母乳分泌は内泌学的制御を受けており,その詳細な知識は母乳指導に理論的な裏打ちを付与するものである。今回代表的な催乳ホルモンであるprolactin(PRL)に着目し,生理的,病的状態でPRLと乳汁分泌との関わりを検索した。